

# 令和5年度(2023年度)事業報告書



NPO法人くるみ-来未

# 令和5年度(2023年度)事業報告

NPO法人くるみー来未（以下、「くるみ」と記載）

## はじめに

初めてくるみの事業報告書を目にする方のため、くるみについて簡単にご紹介します。私たちは「自閉症支援を通じたインクルーシヴ社会の実現」を目指すNPO法人です。2014年に設立し、事業活動は今年で11年目を迎えます。

### <くるみが取り組む社会課題>

現代社会において知的・発達障害等のある人と家族の生活環境はとてつもない。保育園での入園拒否、学齢期のいじめや体罰、部活に参加できない、成人期には離職や生活困窮、家庭以外の居場所がなく引きこもりがちになる等の課題があり、ライフステージを通して親子で孤立しがちな現状がある。また、制度のはざまに居る当事者の場合、一般社会になじむことができず、福祉につながることもできないことで状況が深刻化しやすいが、自己責任の名のもとに放置されてしまいがちである。神奈川県では「ともに生きる社会かながわ憲章」を掲げ、共生社会の実現に向けた取り組みを進めているが、通所・入所施設における虐待事件が後を絶たない。障害のある人や家族に対する社会の理解や支援の不足は深刻であり、「多様性をみとめあう社会」とは程遠い現状がある。

### <課題に対する行政等による既存の取り組み状況>

行政は福祉サービスの拡充を進め、障害児者の通所先は増加傾向だが、依然として以下のような課題がある。

- ① 障害福祉サービスの供給量不足により、必要とする人に届いていない
- ② 成人期の居場所が足りない
- ③ 制度の狭間にいる当事者への支援が不足している
- ④ 障害福祉サービス以外に地域とつながりが持てる機会が少ない
- ⑤ 高齢者など隣接的立場で支援が必要な層との一体的な支援の取り組みが不足している
- ⑥ ③④⑤のような居場所や事業活動の「担い手」を育てる仕組みが不足している。

上記のように障害のある人と家族にとって非常に厳しい社会状況であることを踏まえると、公助の拡充は引き続き重要な課題である。しかし、経済の停滞、所得水準の低下、格差の拡大、不寛容や自己責任論の風潮が強い現代社会において、障害福祉サービスが大きく拡充することは期待しづらい。一方で少子高齢化や共働きの増加に伴う地域・家庭力の低下が顕著であり、共助に頼ることも難しい情勢である。従って、当事者や親が中心のピア・サポート活動を推進するとともに、福祉専門職やボランティア等の力を有機的に結びつける柔軟なソーシャルワークの重要性が増している。

川崎市が策定する「第5次ノーマライゼーションプラン(障害福祉施策の総合計画)」でも、公助・共助の役割は引き続き重要としつつ、互助(インフォーマル・サポート)の重要性について次のように記載されている。「自立した生活の維持に向けて、インフォーマル・サポートが地域の中で提供されるよう、多様な主体の役割分担による『互助』を支える仕組みづくりを進める(P.58/川崎市地域保活ケアシステム推進ビジョンに基づく取組の推進・「3.推進ビジョンの概要」)」。

<くくみの目指すビジョン・ミッション・活動コンセプト>

私たちくくみは、自閉症などの発達障害、知的障害のある人の親が中心となり、専門家やボランティアの力を借りながら、以下のビジョン・ミッション・活動コンセプトに沿って事業活動を展開している。

●ビジョン(何のために?)

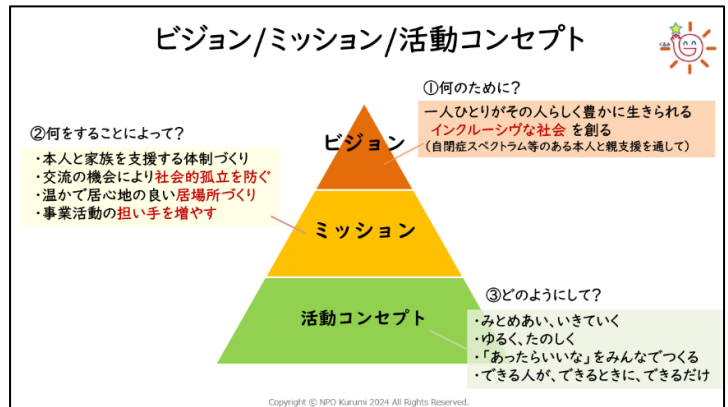
一人ひとりがその人らしく豊かに生きられるインクルーシブな社会の実現  
(自閉症支援を通したインクルーシブな社会の実現)

●ミッション(何をすることによって?)

- ・本人と家族を支援する体制づくり
- ・交流の機会を生み出し社会的孤立を防ぐ
- ・居心地の良い居場所をつくる
- ・事業活動の担い手を増やす

●活動コンセプト(どのようにして?)

- ・みとめあい、いきていく
- ・ゆるく、たのしく
- ・「あったらいいな」をみんなで作る
- ・できる人が、できるときに、できるだけ



<団体の特徴と事業活動について>

正会員数は28名(2024年6月現在)、活動参加者数は延べ3,257人となっている。正会員は、障害のある子を育てる親を中心に、社会福祉士、特別支援学校の元教員、社会保険労務士、就労支援員などの専門家や市民活動家などが主な構成員となっている。

障害福祉サービスの事業所を運営している訳ではなく、助成金や寄附金を主な原資としたインフォーマルな事業活動を展開している。インクルーシブな社会の実現というビジョンに賛同して下さる多くの方から多大な応援とご支援を頂きながら運営して11年目となる。

法人の事務所兼活動拠点として、川崎市中原区上平間地区にある「くくみのおうち」を2020年2月に開所した。月1~2回ほどの頻度で当事者・家族・支援者に向けたイベントや事業活動を行っている。



## 1. 報告期間 令和5年(2023年)4月1日から令和6年(2024年)3月31日【第10期】

## 2. 本年度の事業活動(総括)

前年度に引き続き、川崎市中原区上平間にある法人活動拠点「くるみのうち」を中心に、「インクルーシブな社会づくり」に寄与するための事業活動を以下の通り実施しました。

- 自閉症など障害や特性のある本人と家族に向けたイベントや活動を実施(月1回程度)。
- 青年当事者の居場所づくりとして食事会、イベント企画、生き方を考える会などのピア・サポート活動を実施(月1~2回程度)。
- 喫緊の状況にある家族と青少年当事者を「くるみのうち」に受け入れ、必要に応じて相談援助や家族への介入、関係諸機関へのつなぎを行った。
- 川崎市社会福祉協議会福祉人材バンク様からの依頼を受け、研修会への講師派遣を行った。

正会員・理事会・事務局・スタッフ・参加者のみなさんのご尽力を頂き、喫緊の状況にある人たちに必要な事業を届けられるよう努力を継続しました。スタッフの病気などのアクシデントもありましたが、これまでに行ってきた事業活動に加えて、「危機的な状況にある家族への相談援助」にも尽力した一年でした。他の事業活動も含めて、良い成果を残すことができたこと。そして、本年度も無事に一年を終えることができたこと、関係者の皆さまに改めて感謝いたします。

## 3. 本年度の事業活動(詳細)

※ 以下の事業別損益表では、各事業の名称を次の通り表記しています。  
「インクルーシブな地域社会づくりに寄与するための事業」⇒「インクルーシブ事業」  
「自閉症スペクトラム当事者等のライフスキル向上に寄与するための活動支援事業」⇒「ライフスキル事業」  
「自閉症スペクトラム当事者等に関する普及啓発事業」⇒「普及啓発事業」  
「自閉症スペクトラム当事者等のライフスキル・就労・成年後見に関する情報提供事業」⇒「情報提供事業」

### ① 情報提供事業

費用額: 27,813円 従事人数: 計12名 参加人数: 32名

事業内容	日にち	時間	従事者人数	参加人数	場所	対象者
おやじの会 (父親同士の交流会)	2023年5月13日	11:00~15:00	3	5	くるみのうち(リアル)	知的・発達障害のある子の父親
	2023年9月23日	20:00~22:00	2	6	各自自宅より(オンライン)	
	2024年2月11日	11:00~15:00	3	4	くるみのうち(リアル)	
小計	計3回		8	15		

[おやじの会] 「コロナ禍で交流の機会が全くゼロになって困っている」という父子家庭の方からの切実な声があり、3年前から実施しています。対象は「知的・発達障害のある子の父親」です。「障害のある子を育てる父親同士」だからこそ分かり合えるピア・サポートの場となっています。気軽な会話の中で、地域の情報交換やグループホームの探し方についてなどの相談などができるのは非常に大きな意味を持つことを実感しています。合計3回のおやじの会を実施し、参加延べ人数は23人でした。今後も無理なく、ゆるゆると続けていければと思います。参加をご希望の方は、どうぞお気軽にお問い合わせください。(連絡先: [kurumi.oyajinokai@gmail.com](mailto:kurumi.oyajinokai@gmail.com))



※ 本活動は、神奈川心身障害児福祉基金財団様より助成金をいただいて実施しました。

### ② 普及啓発事業

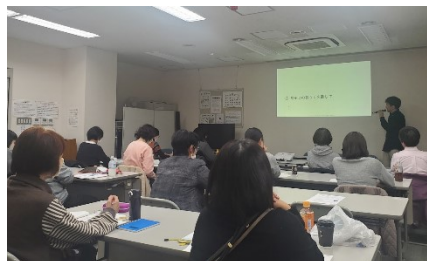
費用額: 46,423円 従事人数: 計5名 参加人数: 86名

事業内容	日にち	時間	従事者人数	参加人数	場所	対象者
発達障害研修(対面)	2023年12月12日	10:00~12:00	3	20	福祉バルなかはら	一般市民
発達障害研修(オンライン)	2023年12月12日	13:30~15:30	3	12		
小計	計2回		6	32		

〔発達障害研修〕 川崎市社会福祉協議会福祉人材バンク様からの依頼により、発達障害研修の講師を務めました。4年目となる今回のテーマは『「多様性」のある社会について思うこと』。会場とオンラインの2回実施しました。親の立場、支援者の立場から、これまでの子育ての実体験で得られた学びと気づきをお伝えさせていただき、みなさんで考えを深め合う場とすることができました。

<ご参加頂いた方の感想(一部のみ抜粋)>

- ・現在の社会の生きづらさをいろいろと考えさせられました。
- ・とてもわかりやすく参加できてよかった。
- ・特性が現れたり、消えたり、真逆になることもあると知った。
- ・発達障害、LGBTQについて具体的な話を聞くことができました。



### ③ ライフスキル事業

費用額: 463,487円 従事者数: 計73名 参加人数: 106名

事業内容	日にち	時間	従事者 人数	参加 人数	場所	対象者
おもちつき	2023年4月8日		6	15	黒川青少年野外活動センター	知的・発達障害のある本人と家族
バスハイク(TOTOCO/地球博/鈴鹿)	2023年6月3日		10	16	地球博物館	
ドラム缶ビザ	2023年12月17日		8	14	黒川青少年野外活動センター	
きんかい (青年当事者の居場所づくり)	2023年4月21日	18:00~21:00	3	5	くるみのうち	
	2023年4月28日	18:00~21:00	2	5		
	2023年5月19日	18:00~21:00	2	3		
	2023年6月9日	18:00~21:00	2	4		
	2023年7月7日	18:00~21:00	2	3		
	2023年7月21日	18:00~21:00	2	3		
	2023年8月4日	18:00~21:00	2	6		
	2023年9月1日	18:00~21:00	2	5		
	2023年9月15日	18:00~21:00	2	7		
	2023年10月6日	18:00~21:00	2	6		
	2023年10月13日	18:00~21:00	2	4		
何やる会	2023年11月10日	18:00~21:00	1	3		
	2023年11月24日	18:00~21:00	2	5		
どかい (青年当事者の生き方を考える塾)	2024年2月18日	13:00~20:00	2	5		
	2023年9月3日	10:00~13:00	2	4		
	2023年10月7日	10:00~13:00	3	3		
	2023年11月4日	10:00~13:00	2	3		
	2023年12月10日	10:00~13:00	2	4		
	2024年2月10日	10:00~13:00	2	3		
小計	計23回		65	129		

本事業のメイン対象は「自閉症スペクトラムのある人と親」。目的は「本人のライフスキル(生きる力)向上に寄与するための活動を支援する(定款第5条より)」ことです。具体的には黒川青少年野外活動センターさんでアウトドアイベントを2回実施(おもちつき/ドラム缶ビザづくり)。そして高尾山へのバスハイクを企画しましたが、雨天のため行先を「地球博物館」に切り替えました。どちらも募集定員いっぱいのお申し込みをいただき、大好評でした。家族だけでは実現させにくい野外イベントを、施設と支援者の力も借りて実現することができました。関係者のみなさまに感謝申し上げます。

昨年度に引き続き、「きんかい(金曜の会)」を月1~2回行いました。これは、「知的・発達障害等のある青年」を対象にした「気軽に話ができる居場所」として金曜夜にみんなで夕ご飯を作って食べる会です。ある時には「青年たちの(精神的、経済的、社会的な)自立に向けた相談の場」となり、またある時には「イベント実施前のスタッフミーティングの場」ともなりましたが、ボランティアスタッフの運営負担が大きく、11月で終了することになりました。

「きんかい」の代わりになる場を自分たちで創りたい!という思いの青年たちを中心に「やりたいことを実現させる場」として「何やる会」が発足しました。打ち合わせを重ねた上で2/18に第一回目となる「何やる会」を実施。銭湯に行く、2時間集中して絵を描く、みんなで鍋を作って食べる、という内容になりました。

「生き方を考える場」として「どかい(土曜の会)」を9月以降、月1回行いました。誰もが生きづらさに悩むことの多い現代社会。「自分らしく、豊かに生きる」にはどうすればいいのか?と悩む青年たちとともに「やりたいことの見つけ方」という本を元にプログラムをアレンジして実施。多くの質問に答える形で考えを深め、意見を述べ合い、お互いの気付きを共有する、という時間を重ねました。

※ なお、きんかい/どかい/何やる会は事業活動の特性上、一般に公募はせずクローズドな場として実施しました。

※ ライフスキル事業は、神奈川県心身障害児福祉基金財団様/川崎市幸区社会福祉協議会様より助成金をいただいて実施しました。

#### ④ インクルーシブ事業

費用額: 499,017円 従事人数: 計51名 参加人数: 209名

事業内容	日にち	時間	従事者 人数	参加 人数	場所	対象者
上平間ふれあいマルシェ	2023年5月21日	10:00~12:00	11	0	なかはら看多機	一般市民
	2023年10月15日	10:00~12:00	13	0		
くるみカフェ	2023年10月28日	10:00~15:00	3	3	くるみのおうち	
	2023年2月23日	10:00~15:00	3	6		
小計	計5回		30	9		

上平間地区の事業所や団体が協働して実施する「上平間ふれあいマルシェ」に2回参加しました。珈琲と壺焼き芋、そして日用品のバザー販売を行いました(第1回目は約100名、第2回は50名程度が来場しましたが、上記参加人数には含めていません)。地域で青年やスタッフの活躍の場を生み出すとともに、美味しいものを作って販売する、お買い得な日用品を販売することを通して地域の人たちとつながり、お互いを知り合い、賑わいと笑顔を生み出す場とすることができました。

くるみカフェを2回実施しました。これは法人拠点の「くるみのおうち」で行っている、どなたでもご参加いただける「お話し会」です。美味しいコーヒーとスイーツでおもてなしさせていただきつつ、集まった人たちが気楽なおしゃべりを楽しむ会です。おしゃべりしたい、くるみのおうちに興味がある、つながりが欲しい、スイーツが食べたい!など、様々な理由で計9名の方々にご参加いただきました。どなたでもご参加いただける場として定着しており、今後も継続していきたいと考えています。

※ 上平間ふれあいマルシェ/くるみカフェは、メディホープかながわ様より助成金をいただいて実施しました。

## 4. 活動参加者/支援者に関する報告

活動への参加者、従事者、寄付者の数は以下の通りです。活動への参加者が前年より大きく減りました。これは、昨年度はスタッフの状況変化や財源不足等の理由により事業活動の一部を中止したこと、一昨年度には上映会を実施したため活動参加者が多かった等の理由によります。

それでも、喫緊の状況にある本人と家族の相談支援をはじめ、以下の数字に表れない大切な支援活動に奔走し、一定の成果を残すことができました。ご協力・ご参加・ご支援いただいた皆さまに心より感謝申し上げます。私たちの事業活動は、支援者のみなさまに支えて頂くことで成り立っています。引き続き、ご参加・ご支援・ご寄付などにより、くるみの運営を支えていただければ幸いです。

・活動参加者 185名 (▲118名)

・活動従事者 106名 (▲12名)

・正会員数 28名 (+1名)

・寄付者 49名 (▲11名)

※ ( ) 内は前年比増減を示す

※ 活動参加者/活動従事者数は延べ人数

## 5. 事務局に関する報告

事務局は、組織の基盤として事業とのバランスを取りながら両輪で運営していく必要があります。くるみで行っている事業活動の屋台骨を支える事務局の活動内容は以下の通りです。

### 〔事務・管理面〕

- ・所轄庁(川崎市)、法務局、税務署、労務に関わる各種手続き
- ・認定および条例指定維持のための各種手続き
- ・税理士事務所との顧問契約を継続、サポートを受けながら税務会計処理を実施
- ・川崎市における障害福祉団体の連絡会、「豊かな地域療育を考える連絡会」の事務局に参加
- ・グループウェア「Kintone」活用による情報共有体制の整備(準備段階)

### 〔くるみのおうちの管理〕

昨年度より「くるみのおうち管理責任者」と「イベント推進リーダー」を中心に各事業を展開しました。各イベントや事業活動の成功の裏には事務局の大変な努力と工夫があります。綿密な打ち合わせや数々の事前準備は、参加して下さる方々が気持ち良い時間を過ごしてもらえるように、との思いの表れで、くるみの事業活動のコアです。これが現在の「くるみらしさ」を形作っています。今後もこの体制を何とか維持していきたいと考えています。

## 6. 財務諸表に関する報告

### 〔貸借対照表〕

- ・総資産は約 407 万円で、対前年比▲58 万円となりました(単年度収支の悪化▲43/減価償却費の計上▲15)。
- ・負債は約 12 万円で、対前年比▲15 万円となりました。役員借入金を完済し、負債は未払金のみとなりました。

### 〔活動計算書〕

- ・収入の部は、助成金、会費・寄付、事業収益による収入により、合計約 89 万円となりました(対予算▲14)。
- ・支出の部は、事業費・管理費合計で約 132 万円となりました(対予算▲43)。
- ・この結果、単年度収支は▲43 万円の赤字となりました。

昨年度より大口の助成金がなくなり、自立的な運営を心掛けたものの、土業家向け支払い/人件費/家賃/減価償却費の支出が嵩んだことで赤字決算となりました。今年度には収支を改善させることを目指すとともに、新たな事業の種蒔きとしての支出は積極的に行うことを計画しています。

## 代表コラム

今から11年ほど前に、息子が小学校を卒業する際に書いた子育て体験記です。今でもこの時の気持ちは変わっていません(いや、少しだけ変わったかな…)。最近読み返してみて、懐かしく思い出しましたのでご紹介します。

---

### ムスリム(イスラム教徒)とオーティズム(自閉症)

“He is Muslim(彼はイスラム教徒なんだよ)” 米国留学中、インドネシアの友人・アンディが私に言ってくれた言葉を聞いた時、私は雷に打たれたような気持ちだった。それは、仲良くなった友達を十人ほど自宅に招いて「一品持ち寄りパーティー」をした時のこと。セネガル人や中国人の友人が餃子をつつきながら「これは何の肉だ?」「それは豚肉だ」などと会話していた。パーティーは盛り上がり、みな思い思いに楽しい時間を過ごせたようだった。ホストとして「みんな楽しんでくれたようで、よかった」と思っていたところ、アンディが最初の言葉を私にかけてくれたのだ。そう、セネガル人の友人はイスラム教徒で、豚肉を食べるのはご法度だったのだ。そのことに全く気付かず「ホストとしての役割が果たせた」と充実感に浸っていた私は、顔から火が出る思いであったと共に、彼に本当に申し訳ないことをしたことを心から後悔した。アンディのこの一言のおかげで私は大切な人生訓を学ぶことができた。それは、「自分が当然と思っていることは、異文化圏の人にとっては当然のことではないかもしれない」ということだ。

それから15年経った今、私は会社員として働き、息子と二人暮らしの父子家庭。日常生活や学校生活で「息子は自閉症です」と他の方にお伝えする機会がたまにあるが、その言葉だけではなかなか意味が通じず、もどかしい思いをする。「自閉症」に対する社会の理解は進んできたとは言われているが、まだまだ誤解や偏見が多くあるのを感じる。

例えばパニックに陥っている息子を見て「あの子は頭がちよっとおかしい」とあからさまに言う人がいたり、「子供の躰くらいちゃんとしとけよ!」と怒られてしまったりする。学校の先生から「手のかかる子をお預かりしているのだから、多少のトラブルは止むを得ない」と言われた時には、しばらく開いた口がふさがらなかった。親戚や親しい人でさえ、息子の特性を理解してもらうのは難しいことがある。もちろん、自分にも分からないことだらけだったから、周囲の人達の戸惑いも分かる。しかし、それは大袈裟なものでも、難しいものでも何でも無い。ただ「自分が当然と思っていることは、この子にとっては当然のことではないかもしれない」という気持ちを持って接すること。必要なのは、ただそれだけのことなのに。(私自身も息子が生まれるまで障害について理解しようとも思わなかったから、偉そうなことは言えないが…)

息子には聴覚過敏や偏食、物事へのこだわりが強い時がある。学校生活でクラスが荒れている、トラブルが絶えない等の理由で、情緒不安定な時には、とりわけ感覚過敏が強かったり、パニックになったりすることが多かった。つまり、困っているのは周囲の人達ではなく、他でもない息子本人だということ。

「それはつらかったね」「週末は好きな電車を見学に行こうね」「美味しいもの食べようね」。家庭でできるのは、こういう声掛けや週末の気分転換、そして本人が感じていたであろう「しんどさ」を連絡帳で伝えるくらい。それでも少しは元気を取り戻してくれたようだった。それにしても、本人の「しんどさ」を他の人に分かってもらうにはどうしたらいいのか?

学校の先生方と指導方針について話し合った時のこと。「苦手な活動であっても、とにかくチャレンジしてみる事が大切です」「どんな小さな一歩であっても、それは立派な成長です」と先生はとても熱心に言う。全くの正論であり、とても大切な考え方だとは思ふ。しかし、それは特性への配慮が十分されている場合にのみ当てはまる。そこで私はこうお伝えすることにした。「豚肉に栄養があるからといって、敬虔なイスラム教徒に餃子を必ず食べなさい、とは言いませんよね?



栄養を取るのは本人にとってもっと食べやすい、他の食材や料理からでもいいのではないのでしょうか？」これが正しいことだったのかは分からない。ただこの先生は音楽療法や吹奏楽器へのチャレンジを提案されていた。音楽をどうしても受け付けられない普段の様子からして、そういった活動を強いることで息子が調子を崩すことは目に見えていた。話し合いの結果、この時は息子の感覚過敏への配慮を優先し、息子は見学や他の課題を与えられることになった。

先生に意見するばかりではなく、自分の立場でもできることはしていきたい。以前息子のクラスメートから「どうして他の子と違うの？」「どうして先生と一緒に居るの？」などと聞かれたことがあった。どんな人でも「知らないものは怖い」。そして「怖いものは排除したい」という気持ちがあると思う。まずは「知ってもらう」ことが必要だ。

そこで総合の福祉の勉強にちなんで「発達障害についての特別授業」をさせてもらえるよう先生方に提案した。他の保護者と協力して「発達障害」について分かりやすく児童たちに紙芝居風に説明したり、体験してもらったりする内容。児童の反応はとても良く、「分かりやすかった」「色んな疑問が解けて嬉しかった」「またやってほしい」などの声が寄せられた。そのような機会を与えて下さった先生方に、心から感謝した出来事だった。

今年3月、息子は無事小学校の卒業式を迎えることができた。おろしたての中学の制服に身を包んだ息子は、本当に頼もしく見えて、誇らしい気持ちだった。今は少しブカブカの袖や裾も、すぐにちょうど良い長さになるのだろう。卒業式は音楽や歌、演奏のオンパレードで、息子にはハードルが高い行事。どうやって苦痛を和らげつつ参加を促すかを、事前に先生方と打ち合わせ、練習を積み重ねた上での本番。先生方の多くの配慮のおかげで、校長先生からしっかりと卒業証書を受け取って握手、一礼することができた。見事だった。

そして、卒業証書を脇に抱えて、保護者席の前を通過して、卒業生の席に戻る途中のこと。なぜか息子は、保護者席の前で、父の姿を探してキョロキョロ見回していた。「どうしたのかな？」と思って見ていると、息子は父の姿に気が付いた。そして、父の近くで立ち止まり、『一礼』した後、卒業生の席に戻っていった。

「お父さん、僕のためにがんばってくれて、ありがとう」

その時の息子は、まるでそう言っていたようだった。ビックリした。

「何を言ってるの。いいんだよ、そんなの。あたり前のことじゃない」

…と心の中で言いながら、涙を押し留めることはできなかった。

息子は学区の中学の支援級に、この4月に進学した。「部活に入りたい！」と張り切っている。卓球部か、美術部に仮入部してみたいらしい。父も中学では卓球部だったから、そちらを選んだら少しはサポートできるかな…。

これからも息子はライフステージによって色々なサポートが必要になるだろうし、完全に自立した生活を送ることは無理だろう。けど、一人ではできないことがあるからって、何だって言うんだろう？そんなのみんな同じじゃないの？私にだって、できないことは山のようにあるんだから！必要なサポートを受けながら、自分の与えられた環境でがんばる。息子がそんな風に暮らしていったら、親としてそれ以上何を望むだろうか？

「息子は自閉症です」「へえ、そうなんだ」

こんな会話が、誰とでも自然にできるような社会にしていきたい。長い道のりかもしれないけど、いつの日かきっと。そのためにも、背伸びしすぎず、これからも息子と楽しく生きていきたい。そして、いつの日か息子とともに、米国留学中に知り合ったアンディにお礼が言いたい。「あの時はありがとう。今の私たちがいるのは、あなたの一言のおかげだよ」と。